Résumé

Judging by the personal reports received by the author from lighthouse keepers in various parts of Japan, the following may be suggested as possible behaviour of night migrants, particularly the Passrines.

1) The passage of night migrants is noticed offshore rather than ashore where there are islands and capes to avoid, and they fly low close to the seasurface.

2) As generally said, they migrate in clear nights, but when the sky suddenly became overcast or rainy, they may be lost and if a lighthouse were close enough its dim light may attract them. In such cases, some of them die struck at the lighthouse and others spend the night nearby to start again in the next favourable evening. In clear night this never happens.

3) The second case of migrant destruction at lighthouses occurs when the weather was good during the day and became cloudy or rainy towards evening. On such a day, migrants gathering around lighthouse at a cape where there are usually good cover for rest, become restless to start for night flight, but the sudden overcast condition urges them only to fly around the light and some or numbers of them will strike at it.

4) Stronger the light the more migrants are attracted from greater distances and the lighthouse at more unstable weather condition is responsible for more migrant victims.

5) In recent years, however, the birds struck at lighthouses has become extremely fewer, owing possibly to: a) the general decrease of bird numbers and b) increase of coastal village lights and lights of fishing boats on the coastal seasurface.

乗鞍山麓に於けるエゾムシクイとメボソの渡来と番形成について Notes on arrival and pair formation of *Phylloscopus tenellipes* and *Ph. borealis* in Norikura Mt, Honshiu 石沢慈鳥 Jicho Ishizawa

はじめに 清棲幸保氏著「日本鳥類大図鑑」(1)によれば 両種の 渡来は次の如くである。

エゾムシクイ 日本北アルプスでは夏鳥で、4月下旬～5月上旬渡来する。標高900～1900 m 位に亘って棲息し、主として標高1000～1500 m の崖地や溪流に面した崖地にある森林に蕃殖する。蕃殖期は上高地(標高1500)にて6月5日(ヒナ), 6月19日(卵), 6月28日(卵), 7月5日(ヒナ)の例がある。去期は8月下旬～9月下旬。

番所原の高原牧場より乗鞍連峯を望む(昭和2年5月30日撮影)

Bansho highland, the study area, and the range of Norikura Mts.

メボソとエゾムシクイの集团的番形成の場所となっていた落葉松林(昭和2年5月28日撮影)

Desiduous needle leaf forest in which flocks for pair formation of *Phylloscopus tenellipes* and *Fh. borealis* before settling to their breeding places above this level, were observed.

メボソ 日本北アルプス地方では、夏鳥で5月上旬渡来する。標高1500—3000 mに亘る亜高山帯—灌木帯の針葉樹林に蕃殖する。蕃殖期は6月23日(卵, 上高地), 7月3日(卵, 上高地), 7月12日(卵, 槍沢), 7月19日(ヒナ, 冷泉小屋)の例がある。去期は8月—10月。

環境 私は昭和2年5月24日から31日まで8日間長野県南安曇村字番所原(人家40—50軒の寒村)を基地にして鳥類の観察をした。

5月27日には乗鞍岳に登山した。亜高山帯の針葉樹林の地上にはまだ厚い残雪があり、それから上の高山帯は残雪が一層多く鳥類の蕃殖にはほど遠いことを思わせた。その日は午後から本年最後の降雪があり、翌朝番所原から眺めると亜高山帯以上の林は雪におおわれて一面真白に化粧していた。

観 察

エゾムシクイとメボソの鳴声はこまでくる間にもあちこちできいたし、番所原でもあちこちできいた。ある崖地の樹林では毎日同じ枝にとまって鳴いているエゾムシクイ 1 羽があった。本例の雌はもう営巣をはじめているものと思われた。5 月 25 日村外れの落葉松林にはこの両種が多数鳴いていた。

5 月 28 日先日からめぼしをつけていた落葉松林にメボソとエゾムシクイの採集にでかけることにした。落葉松林は村外れの溪流の両側に沿って植林されたものである(写真参照)。落葉松林にはメボソが最も多く次はエゾムシクイで、其他少数のセンダイムシクイやヒガラも鳴いていた。

メボソ 落葉松林の外側に立って、そのてっぺんあたりを見渡すと、多いのはメボソで多くの鳥は翼をふるわして、てっぺん附近の小枝から小枝に移りながら同じ方向にむかって移動しているのがよく判る。やがてこの群は大きい円を描いてあともどりしてきた。こんな円陣があちこちと見られた。チョロリ、チョロリ、チョロリとメボソの鳴声のするあたりを見るとじっと、小枝に止って鳴いている。これは雄で難なく採集した。鳴かないで動いているものを採集するのは容易でない。ようやく 1 羽得たものは雌であった。このようにして♂4 羽♀1 羽を採集した。

エゾムシクイ はメボソより若干小さい上、数ははるかに少ないのでその採集は一層困難である。苦労の末ヒツターキー、ヒツターキーと鳴いている♂5 羽を捕ることができた。この間約 2 時間あまりを要した。

考 察

秋や冬であれば一発発射すると、その附近の鳥は全部飛び去るのであるが今は配偶形成に熱中しているために、散弾の飛び散るあたりにいる 2—3 羽が 1 米ばかり飛び立ってすぐ近所にとまるだけである。

メボソやエゾムシクイがこんな動作をしているのはなぜだろうか。これらのメボソやエゾムシクイの蕃殖地域は番所原よりずっと高地の乗鞍岳の亜高山帯高山帯であるが、その辺はまだ残雪が多く営巣産卵育雛には適していないので、山麓の番所原に渡ってきても蕃殖地域の状況が蕃殖に適するようになるまで待っているのであろうと私は考えた。

燈台の衝死鳥の例から考えると両種とも同群中の♂群が早く渡来し、♀群が若干おくれで渡来するらしいが、既に♀も渡来して集団的な番形成の最中と思われた。いわばこの落葉松林のてっぺん附近の集りは、配偶者さがしのダンス・パーティーのようなものであろう。番が形成されるとこのパーティーからはなれやがてそれぞれの蕃殖地が蕃殖に適するようになるので、そこで一定の縄張りを定めて蕃殖に入るのであろう。

また低地の落殖地のものは早く、高地のものは気候がおくれているから、去るのも若干おそいであろう。また乗鞍山麓の東西南北のあちこちには、こんな集団的番形成が行われているであろうし。この番所原のパーティーの落殖地域はこの辺から眺められる乗鞍岳の斜面であろうと考えられる。

私はまた考えたのである。日本に渡来する夏鳥は平地に落殖する、種類と高山に落殖する種類とを区別して考える必要があり、平地に落殖する種類は落殖地域にまっすぐもどってきて、それから配偶者が決定するが、高山に落殖する種類は早目に山麓に渡来し、そこでしばらく滞在している間に配偶者が決定し、高山の落殖地域が落殖に適する状態になった時夫婦揃って、その落殖地域に渡って行くのであろう。またこれに似たようなことは冬鳥や旅鳥（ともに落殖地は日本より遠い地方）または漂鳥に於ても考えることができると思う。

兩種とも卵丸はよく発達して（鳥 77 号 356 頁参照）成熟時の半ば以上のところまで発達しているようである。卵巣はメボソしかないが、大分發育がおくれているようであるこれによって卵丸は卵巣より早く発達すると思われる。これは産卵期に卵巣は急速に發育するが、卵丸は複雑な構造のため急速に發育することができないので、早くから発達しはじめるのであろう。こうした事実は他種に於ても見られるし、また蕃殖が終ると卵巣は早く卵丸は除々に委縮する。

5 月 30 日番所原の落葉松林では、メボソやエゾムシクイの集団パーティーは相かわらずみられた。番所原の上方の高原牧場から乗鞍連峯はまだ残雪が少なくなかった（写真参照）。写真にはうつらないが残雪帯の下部に見られる亜高山帯の地上にもまだ残雪が少くないことであろう。

あとがき 渡りの正体を解明することは至難であるが、それには先ず渡りの性格を分析して一つ二つ三つとその結果を積み重ねて行くことが必要であると考え。また鳥類の渡りの性格は留鳥・漂鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥と渡りの種類と鳥類の種類とによって共通点や相違点がある筈である。

鳥の渡りの正体を知りたいというユメは私も少年の頃から持っていた。私が本誌 74 号—78 号に、発表してきた渡り鳥の小報文がその積み石の一つ二つとなれば幸であるし、これからも三つ四つと積み重ねて行きたいと思っている（昭和 36 年 6 月記）。

Phylloscopus tenellipes and *Ph. borealis xanthodryas* breed in high altitudes in Norikura range, Honshu. They arrive foot zone in early May, but final snow fall on the peak was noticed as late as 27 May. In the foot-zone study area, the Bansho highland, these species were in full song in late May, but were apparently waiting for advance of season before leaving to high range for breeding. They were thus in the stage of pair formation assembly at lower level forest.